

主体的に生きぬく力をはぐくむ読書活動の推進

ー地域全体及び学校経営における推進の方向性ー

樋 渡 美千代¹⁾ 三 浦 登志一²⁾

本研究は、現在行われている子どもの読書活動推進についての地域全体での連携のあり方、さらに、学校経営の中での学校図書館運営及び読書指導のあり方等を、子どもたちに「これからの社会を主体的に生きぬく力をはぐくむ」という視点から考察することを目的としている。2008年告示の学習指導要領では、生きる力をはぐくむことを目指し、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うため、言語活動を充実することとしている。また、山形県では「第5次山形県教育振興計画」において「本が好きな子どもを育てる」ことを、さらに同計画後期プランにおいては「読書を通じて人間性を高める」ことを目指している。現在県内で盛んに行われている読書活動推進の取組は、子どもたちがこれからの社会を主体的に生きぬく力をはぐくむことにどうつながっているのか。また、そのような力をはぐくむために地域・学校全体でどう推進していけばよいのか、国や県の学校図書館に関する調査の結果から見えてきたことを基に考察する。

キーワード：読書活動、連携、学校経営、学校図書館

1 問題と目的

最近、いじめ、不登校、子どもの自殺と、耳をふさぎたくなるようなニュースが報道されることが多い。また、社会のグローバル化、情報化社会の進展による弊害も見られるようになってきた。友だちと遊んでくると出かけた子どもが、3～4人集まってもそこにコミュニケーションはなく、それぞれが持ち寄ったゲーム機でゲームに興じている。ゲームの中で平気で人を殺し、殺される場面も平然と目にしている子どもたちの未来は本当に大丈夫なのだろうか。

「遊ぶ」という概念が、以前は、時にはけんかもしながらともにかかわり合うことで一緒に何かをやり遂げる喜びを味わったり、人と折り合いをつけて成し遂げることの難しさを経験したり、社会に出てからの人間関係形成の基礎を学ぶ大切な場であったが、最近では、どうも違うものになってしまっていないか。また、遊びが、「楽しい」か「楽しくない」かの二極に限定されたものになっていないか。本来遊びは、もっと複雑な感情の変化を伴うものであったはずである。もち

ろん、今でも意図的にこのような場を学校や家庭、地域で仕組んではいるが、それはあくまで仕組まれた場の設定であり、子どもたちが自主的に考え、自分たちで生み出したものではないことも以前と比較すれば多い。また一方で、人間関係のトラブルに巻き込まれないようにする方法を身に付けた子どもたちは、自分の意見を主張することをやめてしまったようにも感じる。当たり障りのない意見を言う、相手が求めている意見を探して言う、または口を閉ざし、自分の感情を口にしない。そのようなかわり方を、今の世の中でうまく生きていくための術としていつの間にか身に付けてしまっているとしたら、これもまた本当によいことなのかと考えさせられる。

日本に以前のような活気が見られなくなっている現在、これからの未来に生きる子どもたちには、今まで以上に世界と協調し、自分の考えを表現するとともに、相手の思いを受け止め、一緒によりよい方向に進んでいくことができる力が求められている。自分で思考し、判断し、自分の思いをしっかりと表現できる、そして、相手の立場に立ってものごとを考えることができる、そんな人間を育てていきたいと考える。

しかしながら、OECDのPISA調査や文部科学省に

1) 山形県教育庁義務教育課

2) 山形大学大学院教育実践研究科

よる教育課程実施状況調査、全国学力・学習状況調査を見ると、我が国の子どもたちは、身に付けた知識や技能を活用して、課題を解決する思考力、判断力、表現力に課題があることは、以前から言われているとおりである。国立教育政策研究所の2003年の教育課程実施状況調査及び2003年に実施されたOECDのPISA調査の結果から、読解力、その中でも特に、記述式問題に課題があることが指摘されていた。続く2009年のPISA調査では、読解力については改善傾向が見られたが、必要な情報を見付け取り出すこと（「情報へのアクセス・取り出し」）は得意であるものの、情報相互の関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結び付けたりすること（「統合・解釈」「熟考・評価」）が苦手であることが指摘された。また、2010年度全国学力・学習状況調査の結果において、例えば、資料や情報に基づいて自分の考えや感想を明確に記述すること、日常的な事象について、筋道を立てて考え、数学的に表現することなど、思考力・判断力・表現力等といった「活用」に関する記述式問題を中心に課題が見られた。

以上の学力に関する各種調査の結果からも、子どもたちに、思考力・判断力・表現力、これらに加え、論理的思考力、コミュニケーション能力、多様な観点から考察する能力などを育成していくことが求められていると言える。

例えば、いじめを目にしたとき、子どもたちはどのように考え、どう行動しようとしているのか。ゲームの世界の出来事としてではなく、目の前で実際に繰り広げられている光景を、どう自分ごととしてとらえ、どう行動すべきと判断し、実際にどう行動するのか。

「ゲーム感覚」ではない、「人間的な感覚」をしっかりとった子どもを育てていきたい。だからこそ、今、子どもたちの言語感覚や感性を磨き、表現力や想像力を豊かにする「読書」の楽しさを教えたいと考える。

「子どもの読書活動の推進に関する法律」（2001）の第二条によれば、「子ども（おおむね十八歳以下の者をいう。以下同じ。）の読書活動は、子どもが言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものであることにかんがみ、すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備が推進されなければならない」とされている。

また、2004年2月の文化審議会で「これからの時代に求められる国語力について」の答申が出された。そ

の中には、国語力を構成している「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」「国語の知識」「教養・価値観・感性等」のいずれにもかかわり、これらの力を育てるうえで、読書は、中核となるものとされており、子どもに読書の習慣を付けさせることは極めて大切なこととされている。

この答申を受け、学習指導要領の改訂においても、児童生徒の読書意欲を高め、日常生活において読書活動を活発に行うように促し、児童生徒の読書力を向上させることの重要性が打ち出されている。2011年度から小学校、2012年度から中学校で全面実施されている学習指導要領では、「言語活動の充実」により思考力・判断力・表現力等をはぐくむことが大切だとされているが、そのために読書活動が担う役割は極めて大きい。

本研究では、現在県内で盛んに行われている読書活動推進の取組は、子どもたちがこれからの社会を主体的に生きぬく力をはぐくむことにどうつながっているのか、また、そのような力をはぐくむために地域・学校全体でどう推進していけばよいのかということについて、本県の現状と課題を切り口に検証することを目的とする。

2 読書活動推進の視点

(1) 地域全体における読書活動推進計画の策定

少年非行の増加、未成年による凶悪犯罪の発生が見られるようになったことが国会でも取り上げられ、1999年に「子ども読書年に関する決議案」が採択された。このことにより、子どもの心を育てるために「読書活動」の推進が今まで以上に必要であるとされ、2001年には、「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定されることになる。この制定により、国や地方公共団体には、子どもの読書活動の推進に関する施策を策定し、及び実施する責務が、保護者には、子どもの読書活動の機会の充実及び読書活動の習慣化に積極的な役割を果たすことが求められるようになった。さらには、国及び地方公共団体は、子どもの読書活動の推進に関する施策が円滑に実施されるよう、学校、図書館その他の関係機関及び民間団体との連携の強化その他必要な体制の整備に努めるとされており、そのために、各自治体に子どもの読書活動推進計画の策定が求められた。

このことを受け、山形県では第1次計画を2006年2月に策定、その成果と課題を検証した上で、第2次計画を2011年12月に策定している。

この『山形県子ども読書活動推進計画（以下「県計画」）』（2011）は、行政が中心となり、家庭、幼児教育

機関、学校、地域が一体となり本が好きな子どもを一人でも増やしたいという共通の思いをもって作業を重ねて策定された。読書は、言葉を学び、感性を磨き、表現力や想像力を豊かにすることはもちろんのこと、読書により得られる読解力や思考力は、自ら課題を見つけ、解決しようとする力の向上につながる。これこそが、今求められている大切な力であるという共通理解のもとでの策定である。しかしながら、この作業は、初めから壁に突き当たることとなった。同じ行政機関の中でも、幼稚園、保育所、義務教育諸学校、高等学校、家庭、図書館と、それぞれ担当部署が違うため、どの部署が中心となり策定するかということから話し合いが必要だったのである。しかし、担当課も決まり、話し合いを何度も重ねていくうちに、関係部署同士、何かあればすぐに相談し合えるような関係が構築されてきた。

読書活動推進計画策定の目的は、子どもの読書活動を総合的・組織的に推進していくということが第一義ではあるが、関係機関同士の風通しのよい関係性の醸成という点でも、とても意味のあることである。自治体の推進の方向性を示すこの計画策定の過程で、関係機関が共通の思いをもち、共に取り組んでいこうとする「つながり」が構築されれば、今まではそれぞれ単独で取り組んでいた取組が、総合的なものになり、単独の取組の何倍もの効果が期待できるのではないだろうか。このことが、結果的として、子どもたちに思考力、判断力、表現力、そして豊かな心をはぐくむことにつながっていくのである。

現在、県内市町村の子ども読書活動推進計画（以下「市町村計画」）の策定状況は決してよいとは言えない状況にある。しかし、各市町村が読書活動に関する取組を全く行っていないわけではなく、むしろ他県の市町村以上にすばらしい取組を行っているところが多い。

そのような中、現在少しずつではあるが、策定に向けて市町村が動き始めている。動き始めは、なかなか大変であることは、よく理解できる。しかし、日頃からよりつながりの深い市町村内での策定であるため、県以上に機能する関係が構築されるはずである。

ただし、県計画も市町村計画も、計画の策定は、あくまで取組のスタートでしかない。子どもたちの読書活動を推進するために大切なのは、策定した計画の積極的活用にある。

本が好きな子どもを育てるには、まずは家庭、地域、学校がそれぞれの担うべき役割をしっかりと果たすこと、そして、お互いに十分な連携を図りながら、

社会全体で取り組んでいくことが大切である。そのためにも、策定した計画を活用し、いつまでに、誰が、何を、どんなふうに進めていくのかを明確にし、定期的に評価・改善していくことが求められる。また、それぞれの機関が、どのようなねらいでどのような取組により読書活動を推進しようとしているのか、さらには、推進するうえでどのような点を課題と考えているのか、まずはお互いに知ることが大切である。他の機関にとっては課題でも、自分たちにとっては比較的取り組みやすいこともあるかもしれない。他機関にとっての課題解決のために、自分たちができることはないかを主体的に考えることも大切なのではないかと考える。本県では、お互いの取組をそれぞれイメージしてもらえよう、県計画の随所に、コラムの形で県内の具体的事例を盛り込み、紹介している。

先述のとおり、計画策定は、あくまでスタートである。推進の方向性を共有し、より地域の子どもの実態に合うよう取組を具体的に捉え直し、創意工夫しながら推進していくこと、そして、その取組を相互に交流しながら、この計画をより充実したものに更新していくことが大切である。

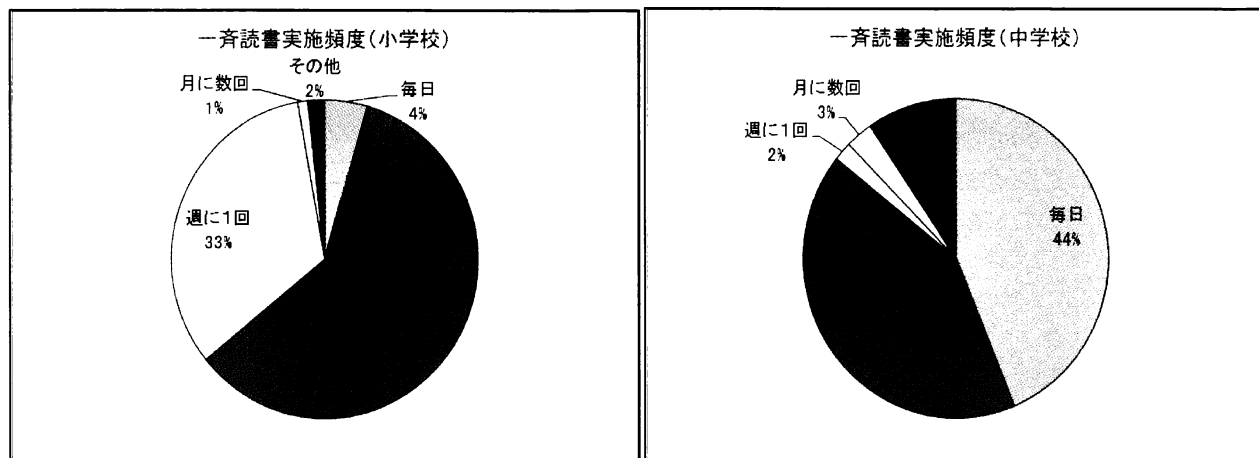
それぞれの機関をつなぐという大切な役割を担うのが、行政である。それぞれの機関が効果的に取組を積み重ねていくためにも、各自治体の計画策定は必要であり、この計画に従って総合的に子どもの読書活動の推進を図りたい。個々の動きが組織としての大きな動きとなり、このことが、本が大好きな子どもを増やすことに、また、子どもに思考力、判断力、表現力、そして豊かな心をはぐくむことにつながっていくのである。

(2) 学校における読書活動の推進

① 学校における読書活動のさまざまな取組

どの学校においても、読書は「生きる力」の育成のため、大変重要なものと考えられており、本県でも以下のように、多くの学校で計画的に教育課程の中に位置付けられている。特に全校一斉読書の時間については、ほとんどの学校で位置付けられている状況にある。

2000年度に実施された学校図書館の現状に関する調査（文部科学省）によれば、小学校で97.4%、中学校で97.3%だった実施率が、2012年度には小学校で98.3%、中学校で98.1%となり、100%に少しずつ近づきつつある。2012年度調査の内訳を調べてみると、実施している学校のうち、小学校の94.1%、中学校の92.4%は始業前に実施している。実施頻度は、毎日実施が小学校で4.5%、中学校で43.8%、週に数回実施



学校図書館に関する調査（2012）文部科学省

図1 小学校及び中学校の一斉読書の実施頻度

が小学校で59.6%，中学校で41.9%，週に1回実施が小学校で33.1%，中学校で2.0%となっている。中学校では毎日，小学校では週に数回実施している学校が多い（図1）。たとえ10～15分といった短い時間でも，継続して行うことが，児童生徒の読書に取り組むきっかけとなっている。

しかし，このことが日常生活の中で読書の習慣化につながっているかという点，若干疑問も残る。

と言うのも，全国学力・学習状況調査（2012）の質問紙調査によれば，「家庭や図書館で，普段（月～金曜日）1日当たりどれくらいの時間，読書をしますか（教科書や参考書，漫画や雑誌除く）」の問いに対して，全くしないと答えた本県の小学生の割合は18.1%（全国22.5%），中学生の割合は33.8%（全国36.8%）であった。放課後は，塾や部活動などで忙しいためか，読書にあてる時間が中学生ほど短くなっている。しかし一方で，本県では小学生の81.9%（全国77.5%），中学生の66.2%（全国63.1%）は，ほんの短い時間であっても家庭や図書館で読書をしているということも事実である。このことを考えれば，確かに学校での一斉読書が家庭での読書のきっかけになっているとは言えそうだが，それが日常生活での読書の習慣化とまでは，言えない状況のように思われる。

さて，日常化しているからこそ形式的になってしまっている朝の一斉読書の取組を，改めて見直してみた中学校がある。例えば，生徒たちの日常生活の中で，読書のことが話題にのぼるよう，国語科において感想や考えを交流する場を意図的に設け，生徒の読書の幅を広げるといった取組である。この読書交流会をきっかけに，今までは自分の好きな本ばかりを読んで

いた生徒たちが，名作文学を自分から進んで読もうとしたり，友だちから薦められた本を読み始めたりするようになった。自分のお薦めの本を友だちに紹介するとともに，友だちのお薦めの本を読む。読後，紹介してくれた友だちと感想を語り合う。このようなコミュニケーションこそ，読書活動の最大の醍醐味である。自分の思いを表現し，相手の思いを受け止める活動には，まさに思考，判断，表現が伴う。また，自分が薦めた本を友だちも気に入ってくれたり，あるいは自分が今まで手にしたこともなかった本との出会いがあったりと，これまで味わったことのない読書の喜びも体験することになる。第一段階としての「きっかけづくり」としての一斉読書から，次のステップとしての「読書を通しての心の交流」や「子どもたちの主体的な読み」，「思考・判断・表現が伴う読書活動」，「読書の幅の広がり」などという点で，今までより質の高い一斉読書へと，一歩踏み込んだ取組であると言える。

また，一斉読書以外の取組についても，図2に示したとおり大変高い割合で実施されており，その内容としては，読み聞かせ，ブックトーク，目標読書冊数の設定，必読書・推薦図書等の設定などがある。必読書・推薦図書等の設定などは，2006年度の調査時と比較すると，小学校で約43.4ポイント，中学校で45.4ポイント増え，小学校で81.5%，中学校で68.2%となっている。

読み聞かせについては，学校以外の団体と連携して行っている学校も少なくない。2012年度，小学校では83.9%，中学校では23.4%の学校で行われている。小学校においては，2004年度に40.5%だったことを考えれば，かなり広がりを見せている。地域のボランティア

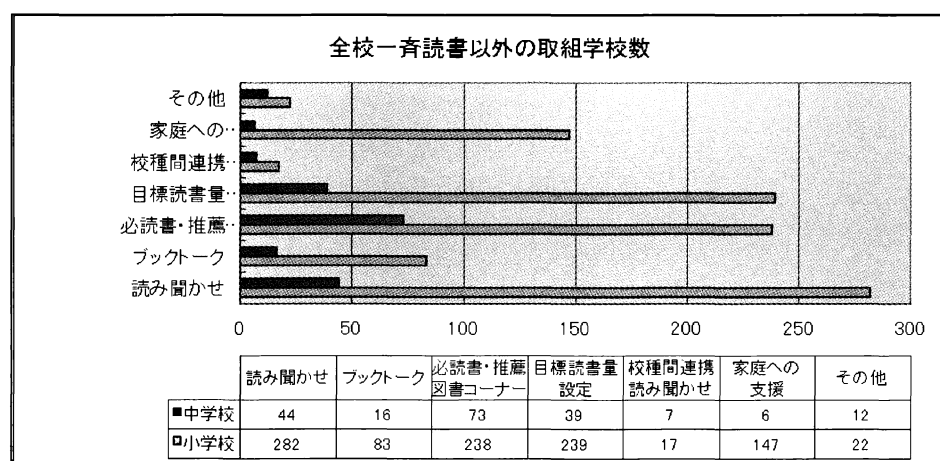


図2 全校一斉読書以外の取組学校数

アの方が、毎週のようにローテーションを決めて学校に入り読み聞かせをし、子どもたちもその来校を楽しみにしている。ボランティアの方からは、毎週が挑戦であると伺った。子どもたちが楽しみにしてくれているのが伝わってくるだけに、どのような本を読み聞かせるか、その選書にとっても悩むという。ボランティアの方々は、作品そのものもメッセージとともに、読み手のメッセージをも子どもたちに送っているのである。

このように、全国と比較しても非常に活発な活動が行われている本県であるが、公立図書館との連携という点では、市町村による温度差も見られる。連携している学校の割合は年々高くなってきてはいるものの、小学校で67.8%、中学校で44.9%となっており、これは全国と比較すると依然として低い状況にある。ただ、公立図書館の施設・設備の問題もあるため一概には言えないが、様々な工夫が凝らされている公立図書館のサービスを活用できれば、さらに読書活動の可能性は広がるはずである。

ある公立図書館では、読書祭りを開催し、様々なイベントを行っている。また、ある図書館では、学習指導要領の改訂で教科書が新しくなったことを受け、国語科の教科書に載っている関連図書をそろえ貸出を始めた。また、要望があれば、図書館同士のネットワークを使い、本の検索や取り寄せも行い、たとえ1冊でも学校に届けてくれるサービスを行っている図書館もある。

全国学力・学習状況調査によると、「本が好き」と答える本県の子どもの割合は、少しではあるが全国より高い状況にある。2012年度の結果によれば、「読書が好き」あるいは「どちらかと言えば好き」と回答し

た児童生徒の割合は、小学校で77.4%（全国72.6%）、中学校で72.1%（全国69.7%）であった。これまで述べてきた様々な取組が功を奏し、確実に読書好きの子どもたちが増えてきている。きっかけとしての読書は定着しつつある。だからこそ、次のステップとして、子どもにこれからの社会を主体的に生き

ぬく力をしっかりととはぐくむ読書活動になっているか、より効果的に推進するにはどうすればよいかという視点で、これまでの取組をもう一度見直し、改善を加えていく必要がある。

② 司書教諭等を中核とした学校図書館の運営

さて、ここでは、学校経営という視点から、学校図書館の組織的な運営について考えてみたい。

一連の教育改革の流れの中で、学校図書館法が改正され、第5条の1項に「学校には、学校図書館の専門的職務を掌らせるため、司書教諭を置かなければならない」とされた。この司書教諭は、司書教諭の講習を修了した者でなければならない。また、12学級以上の学校においては、司書教諭を置かなければならず、11学級以下の学校においては、司書教諭の資格取得者の数が十分とは言えない現状であることを踏まえ、当分の間置かないことができるとされている。

司書教諭の職務としては、「学校図書館資料の選択・収集・提供や子どもの読書活動に対する指導等を行うなど、学校図書館の運営・活用について中心的な役割を担う」とされているが、具体的には以下のようなものがある。

【総務的職務】

- ・学校図書館運営計画の立案と実施
- ・年間計画の作成・管理
- ・読書指導・利用指導計画の立案と実施
- ・予算の編成と支出の調整
- ・施設の整備・備品の管理

【技術的職務】

- ・図書館メディアの選択と構成
- ・図書館メディアの整理
- ・蔵書点検と更新

【サービスの職務】

- ・学校図書館利用指導
- ・読書相談
- ・児童・生徒の図書館運営
- ・学校図書館行事
- ・教員の授業準備支援
- ・情報検索支援
- ・保護者や地域住民の学校図書館利用支援 等

現在、県内すべての12学級以上の学校で、司書教諭の発令を行っている。11学級以下の学校では、現在のところ猶予されていることもあり、発令状況は全国的にも2割程度にとどまっているが、本県ではさらに低く、学校図書館に関する実態調査（2012文部科学省）によれば、小学校で3.0％、中学校で5.4％となっている。また、12学級以上の学校うち、司書教諭の授業を軽減している学校は、小学校で8.9％、中学校で7.8％にとどまっており、司書教諭が、学校図書館業務以外にも学級担任等様々な業務を抱えており、その職が形骸化している例も少なくない。時間の裏付けがない中で、上記のような業務を行うのは現実的に難しい状況にある。

では、そのような中で、授業の軽減が図られ、司書教諭が学校図書館業務に充てることができる時間を保障されている学校では、どのような取組が行われているのだろうか。

司書教諭の時間割の中に「学校図書館業務」の時間が週に数時間位置付けられている学校がある。この学校では、このような時間が保障されることで、学校図書館職員（市町村が配置している非常勤の事務職員）との打ち合わせを定期的に行うことが可能となった。以前は、学校図書館職員が非常勤職員であるため、学級担任でもあり部活動の顧問でもある司書教諭が、学校図書館に足を向ける時間には、非常勤の職員は帰宅したあとであり、打ち合わせの時間さえ確保できない状況にあった。この打ち合わせをもつことで、司書教諭としての図書館運営の方針を十分に共通理解したうえで、計画的に作業分担を行い、進めていくなど、計画的な学校図書館運営が可能になったという。

また、読書指導に関する校内研修を企画・運営する時間も捻出され、全教職員を巻き込んだ読書指導が可能となった。司書教諭は比較的一人で学校図書館を任されていることが多いため、なかなか人に相談して仕事を進めることができない。ましてや中学校では、放課後には部活動指導もあり、他にも分掌を担う同僚と一緒に何かをしてほしいと依頼することに抵抗を感じ、

結局一人で抱え込んでしまうケースも多い。しかし、このような研修会をもつことで、全教職員が読書の大切さを再認識するとともに、学校図書館を自分たちのものとして考え、自分の担当教科の授業の中でも学校図書館を積極的に活用することにつながっていく。

さらに、学校によっては、時間割の中に「読書活動推進委員会」の時間を位置付けている学校もある。この中学校では、各学年の学校図書館担当職員が一堂に会し、読書指導についての話し合いをもつ時間を確保している。この委員会の時間をもつことで、やはりこれまで一人でやってきた業務について、他の教師に相談する機会が保障され、以前に比べ、より自信を持って業務を進めることができるようになった。こうなると、学校図書館のあり方や、日常化した読書活動のあり方などについても、現在のやり方に課題はないのか、より子どもの育ちにつなげていくには、どのように手を加えていけばよいのかなどの話し合いをもつことも可能になる。

また、児童会及び生徒会の図書委員会の活動についても、これまで以上に子どもたちの自主性を大切に活動を仕組むことができるようになる。新書購入のための選本の際、子どもたちの要望を取り入れたり、一緒にお薦めの本の特設コーナーを作ったり、多読賞の表彰の準備をしたりと、子どもの目線からの意見をも大切に学校図書館運営へとつながっていく。

山形県では、教育山形さんさんプランを実施し、独自の少人数学級編制により様々な効果を上げているが、そのため担任外の教員の数が少ない状況にある。そのような中で、司書教諭が学校図書館業務に充てられる時間数を十分に確保することはなかなか難しい現状も十分に理解できる。

そこで、せめて週に1時間でも2時間でも、司書教諭が学校図書館の業務に充てることができる時間を保障できないものだろうか。司書教諭に業務遂行のための時間が保障されれば、それがすなわち、学校図書館の充実、子どもたちの姿の変容につながっていくのである。せっかく専門的な知識をもった司書教諭が配置されていながら、活用されていないのではもったいない。是非子どもたちのために、司書教諭等を中核にした組織的な学校図書館の運営を目指したいものである。

しかし、いくら司書教諭や学校図書館主任が声を上げたところで、なかなか変わらない現状がある。この現状を変えていくには、何よりも管理職の深い理解と協力が必要である。学校図書館が効果的に機能している学校では、管理職が読書活動の意義や学校図書館の

重要性を誰よりも認識しており、読書指導が学校経営の中に、その中核としてしっかりと位置付けられ、それが根付いている。学校経営の中で、司書教諭等を中核とした学校図書館の運営の重要性が認識されれば、確実に学校図書館が変わる。教師の認識が変わる。保護者の意識も変わる。そして、この変容が、子どもの姿となって現れてくるのである。

③ 授業における読書活動

先述したように、2009年PISA調査結果によると、我が国の生徒の学力は、読解力を中心に改善傾向にあるとされている。読解力については、必要な情報を取り出すことはできるが、それらの関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結びつけたりすることがやや苦手とされており、本県の児童生徒にも、全国学力・学習状況調査の結果において同様の傾向が見られる。例えば、2012年に実施された調査でも、「目的に応じ、雑誌や読んだ記事の特徴を捉えることができるかどうかをみる」問題で、編集者の意図を捉えたり、目的に応じて記事を結びつけながら読むことや複数の記事を結びつけながら読み、事実を基にして自分の考えをもったりすることに課題が見られた。過去の調査結果からも、目的や意図に応じて、必要となる事実を読み取ったり、複数の情報を関係付けたりしながら、分かったことや自分の考えをまとめることに課題があったことが分かっている。

これからの社会を生きていく児童生徒にとって、大切なのは、文章の中から必要な言葉を取り出すだけの国語の力ではなく、自ら課題を設定し、自分で思考し、判断し、自分の言葉で表現して、相手に自分の思いや考えを伝える力である。そのためには、単に知識を詰め込む受動的な学びではなく、課題を解決する過程において、主体的な思考や判断を促すような授業を行っていくことが求められる。学習指導要領の中でも「言語活動の充実」がうたわれ、どの教科・領域等においても課題解決の過程を大切にしていける視点が示されている。

これまで、例えば、算数科や理科、社会科といった教科では、比較的この過程が重要視され、授業者もその点を大切に単元づくりを工夫してきた。しかし、国語科に関して言えば、全文を通読し、初発の感想を書き、場面に分け、分けた場面ごとに詳細に読み、指導者の発問に答えるといった授業があたり前のように行われてきた状況がある。子どもたちは教師の発問に対する答え探しに終始し、自分が本当に調べたいと思う課題に対しての答えを探し、言葉を手がかり

にして考え、自分の言葉で表現するという一連の過程そのものは、残念ながらあまり大切にされてこなかった。その結果、PISA調査や、全国学力・学習状況調査に見られたように、情報の取り出しはよくできるが、その情報を目的に応じて整理し、関連づけ、それを基にして自分の考えをもち、その考えを表現するという力が身に付いてこなかった。しかも、そのような従来の「読み」は、私たちが日常生活の中で当たり前に行っている「読み」のプロセスとは違っているのである。

通常私たちが行っている「読み」は、読む目的に応じて読み方を変えている。例えば、新聞を読むという行為を例に挙げてみる。中には、もちろん最初のページから最後のページまで、同程度の重きを置き詳細に読む場合もあると思うが、たいていの場合、自分が必要だと感じている部分、知りたい部分、興味をもった部分を選択し、ある部分は熟読し、ある部分はさらっと目を通す程度に読み、ある部分は必要な情報をピックアップしながら読み、ある部分は表やグラフのデータと関連づけながら読むというように、同じ新聞を読むという行為の中でも、読みの目的に応じて異なる読み方をしている。そこには幅広い読む能力が求められている。各教科・領域等で、本や資料を用いて調べる学習活動を行う場合には、課題に応じてどのような本や資料を選び、それらの中から必要な情報をどのように見つけるのかといった選書・検索の能力や、見つけた情報を分類・整理し、自分の考えを明確にしていくために引用したり要約したりする能力など、幅広い能力が必要となる。

各学校においては、自ら学び、課題を解決していく力の育成につながるこれらの学習活動を、学校図書館を活用して、意図的・計画的に展開することが求められる。

では、どのようにすれば、各教科・領域等で幅広い読む能力を身に付けることができるのか。

国語科では、教科書で取り上げられた教材のみを取り扱い、それだけを何度も何度も読む学習から、シリーズで読む、同じ作者の他の作品を読む、作者の生き方について書かれた本を読み作品とつなげて読む、同じテーマで書かれた別の作者の作品を比べて読むといった、並行読書を通して読みを広げる学習が全国各地の学校で展開されるようになってきた。また、社会科や理科では、自分の課題に応じて、複数の資料を比べて読み、必要な情報を選択し要約する学習活動が取り入れられている。また、音楽科や美術科では、ある作品を学習する際、その作品をこの世に生み出した作

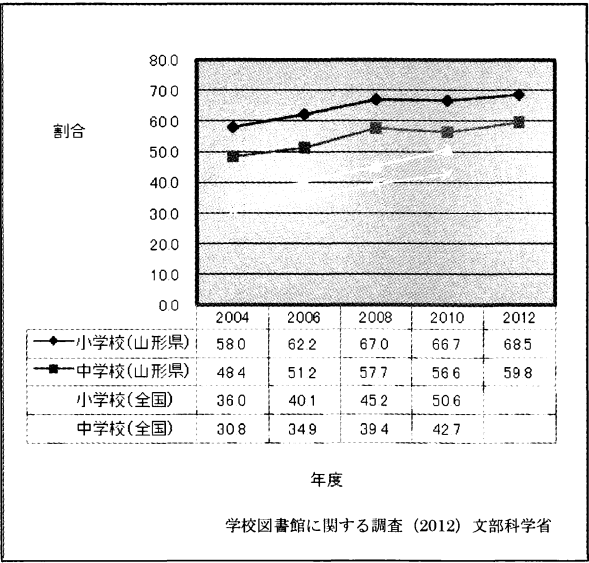


図3 学校図書館図書標準の達成状況

曲家や画家の伝記を読み、その生涯や背景を知ったうえで改めて作品を味わうといった学習も行われている。

これまでは、学校図書館を活用するのは、国語科が中心であり、時には、社会科や総合的な学習の時間に活用するといった考え方であったが、現在は、各教科・領域等のねらいに応じて、より多くの授業において学校図書館を活用し、学校図書館の効果的活用の拡大を模索し始めている学校も増えてきている。しかも、この活用を学校としての共有の財産とするため、読書指導と関連する単元名や活動内容などをまとめた一覧表や指導案集などを作成している学校もある。

ただ、この際に注意しなければならないことは、学校図書館の活用そのこと自体が目的にならないようにすることである。その学習は、子どもたちがそれぞれの課題を解決するために、自ら図書を選択し、必要な情報を集め、自分自身で判断し自分の考えをもってそれを表現する、主体的なものでなければならない。子どもたちが、主体的な学びの方法として図書館活用力を身に付けることこそが、実生活に生きてはたらく本物の力をつけることにつながるのである。

(3) 学校図書館の充実

子どもの読書サポーターズ会議（2009年）の報告によれば、今、求められている学校図書館の機能には、次のようなものがある。

① 学習・情報センターとして

学校図書館は、児童生徒の自発的、主体的な学習活動を支援するとともに、情報の収集・選択・活用能力

を育成して、教育課程の展開に寄与する「学習・情報センター」としての機能を果たす。

② 読書センターとして

学校図書館は、児童生徒の創造力を培い、学習に対する興味・関心等と呼び起こし、豊かな心をはぐくむ、自由な読書活動や読書指導の場である「読書センター」としての機能を果たす。

③ 教員の授業改善や資質向上のため

「学校図書館の計画的な利用とその機能の活用」は学習指導要領の総則中に規定されており、各教科等を通じ、どの教員にも求められる。指導の改善・充実や自らの資質向上のため、それぞれの教員が、学校図書館の機能を有効に活用するスキルを身に付けていく。

④ 居場所として

昼休みや放課後の学校図書館は、教室内の固定された人間関係から離れ、児童生徒が自分だけの時間を過ごしたり、年齢の異なる様々な人々とのかかわりを持ったりすることができる場となる。児童生徒がこのような学校図書館を、校内における「心の居場所」としているケースも多く見られる。

まず、県内の「学校図書館図書標準」の達成状況は図3に示すとおりである。「学校図書館図書標準」とは、1993年3月に、公立義務教育諸学校の学校図書館に整備すべき蔵書の標準として、学校種及び総学級数に応じてその蔵書数を国が定めたものである。国としても交付税措置で支援を続けているものの、2012年現在、学校図書館図書標準を達成している県内の学校は、小学校で68.5%、中学校で59.8%となっており、まだまだ十分とは言えない状況にある。

そんな中ではあるが、現在県内には、学校図書館を大改造し、その機能改善に取り組んでいる学校がある。これまでの学校図書館は、学習・情報センターとして機能が十分ではなかった。学校図書館を調べ学習で活用しようと思っても、自分たちの学校図書館にどんな蔵書があるのかが分からない。たとえあったとしても、それらがどの棚のどの場所に置いてあるのかが分からない。もしかすると分からないのは子どもたちだけではなく、活用する教師も残念ながら分かっていない可能性もある。これでは、学校図書館の積極的な活用につながるとは考えにくい。そこで、読書センターとしても学習・情報センターとしても充実している学校図書館を目指し、本県で昨年度から実施している読書活動推進プロジェクト事業を活用して、全校児童生徒及び全教職員で大改造を行った事例を紹介したい。

司書教諭等と学校図書館支援員による事前準備のあ

と、ラベルの張り替えや表示の作成などは全教職員が夏期休業中に行う。実際の改造は、県が派遣するアドバイザーの助言により、児童生徒及び全教職員で一気に行われた。教職員が全員作業に加わることで、自分たちの学校図書館には、どんな本がどこに置いてあるのかを改めて知ることになる。この結果、これらの学校の多くの教職員が、学校図書館の意義を再確認するとともに、学校図書館を活用した授業づくりを目指すようになった。また、子どもたち自身も大改造作業に参加したことで、自分たちの学校図書館という意識がより強くなり、以前にも増して、学校図書館に足を運ぶ回数が増えた。一人一人の子どもが、学校図書館の使い方をしっかり身に付けることにより、自分の力で本を探すことができるようになる。本の置き場所には一定のルールがあり、そのルールが分かれば読みたい本を即座に探すこともできる。このような学校では、これまで使用していた代本板（本を借りた場所が分からなくならないように、自分の名前が書かれている板を代わりに置いておくもの）も必要なくなった。また、この本の探し方は、学校図書館だけではなく、公立図書館に出かけた時にも役に立つ。まさに、この取組を通して、子どもたちは実生活に生きてはたらく図書館活用力を身に付けることになる。

また、学校図書のデータベース化も、子どもたちの読書活動の可能性を飛躍的に広げる。蔵書管理はもちろんのこと、子どもたちが1か月に、1年間に、3年間に、6年間に読んだ冊数を瞬時にして把握することも可能だ。子どもたちが自分の読書歴を知るうえで貴重な情報としてストックされているため、自分の読書傾向についても客観的にとらえることが可能になる。自分がどんな分野に興味があるのか、どんな分野の本をほとんど読んでいないのかなどを知ること、新たな自分を発見することにもつながる。

さらに、このような取組で学校図書館の機能が充実し、足が運びやすい場所となると、そこは、子どもたちにとってのオアシスとなる。心が落ち着く場所となり、そこで大好きな本を一人でじっくりと読む。あるいは、友だちと一緒に読む。また、本を読むことはなくとも、司書教諭や学校図書館支援員が作業している様子を黙って見ていたり、一緒に作業を手伝ったりすることで、それまでちょっと落ち着かなくなっていた自分の気持ちを整理し、その後何ごともなかったかのように教室に戻って行く子どももいる。

学校図書館法において、学校図書館は教員のために資料を収集・整備・保存・共有する施設としても位置

付けられている。このことを考えれば、教師にとっても、本来そこは教科・領域等関係なく、教材研究のための大切な拠点となるはずである。

このように考えると、学校図書館は、ただ単に子どもたちが本を読む場所、調べ学習をする場所というだけではなく、教室とはまた違う意味で、子どもたちの心の居場所や教師にとっての研修の場としても、かけがえのない大切な場所になり得るのである。現在、それぞれの学校において、学校図書館はどのような場所と考えられているのだろうか。その重要性はどのようなものにとらえられているのだろうか。学校経営という視点から、学校図書館の意義を再考すれば、これからの社会を主体的に生きぬく子どもたちを育てるうえで、様々な可能性が模索できるのではないかと考える。

3 考 察

(1) 総合的・計画的に読書活動を推進する

連携が大切であると言うことは、誰もが分かっていることである。しかしながら、連携するとはどういうことなのか、その具体が見えていない場合が多いのではないだろうか。読書活動は子どもたちにとって重要なものであることも分かっており、それぞれの地域において、各機関それぞれが頭を悩ませ本好きな子どもを育てるために工夫を重ねている。それらの工夫をそれぞれの機関のよさや独自性を生かしつつ、効果的に連携することができれば、今まで以上に手応えを実感し、実践の積み重ねのあるものになるのではないか。このことが、結果として、子どもの姿の変容にもつながっていくことになる。関係機関をつなぎ、総合的・計画的に読書活動を推進する。その「つなぐ」方策の一つが「読書活動推進計画」の策定であり、行政の役割として期待されるところであると考えられる。

(2) 読書活動を学校経営の中核に据え、学校のエデュケーション全体を通して推進するとともに、学校図書館を充実させる

学校経営の中核に読書活動を位置付け、組織として読書活動を推進している学校では、以下のような特徴が見られる。

- ① 教育目標実現のために、経営方針の中に学校図書館の活用の視点が位置付けられている。
- ② 司書教諭等を中核とした組織としての学校図書館運営が機能している。
- ③ 読書センターとして、学習・情報センターとして、蔵書が充実している。

- ④ 行っている読書活動のそれぞれの取組が、目指す子どもの姿にどうつながっているのかを全教職員で共通理解した上で、推進されている。
- ⑤ 各教科、領域の授業の中で、学校図書館を積極的に活用した授業が積み上げられている。
- ⑥ 保護者や地域のボランティア、地域の公立図書館とも理念を共通理解し、それらを巻き込んだ活動が展開されている。
- ⑦ 子どもたち、保護者、教職員、地域の全てが、本の魅力、読書の必要性、学校図書館の重要性を理解し、そのよさを実感している。

上記のような視点から、それぞれの学校で行われている取組をもう一度見直してみてはいかがだろう。より充実した読書活動を推進するため、また充実した学校図書館にするための改善の方向性が見えてくるのではないだろうか。

「本が好き」「読書が好き」という子どもたちの中には、学校で与えられた読書の時間を楽しんでいる子どももいれば、家庭でも時間を見つけては本を読んでいる子どももあり、その状況は様々である。読書への誘いという点を考えれば、学校での読書に充てられた時間を十分に楽しむということで、目標を達成しているように思われる。しかし、今、なぜ「読書」なのかを最後にもう一度確認しておきたい。東日本大震災以降、いつどこで何が起こるか分からないという危機感、今まで以上に高まってきている。そのような状況の中で、何か問題が発生したときに、自分がもっている知識や知恵をもとに、自分でしっかり考え、判断し、よりよい方法で解決していくことができる自立した人間を育てたい。そのためにも、子どもたちには、読書の習慣を身に付け、日頃から読書そのものを十分に楽しみながらも、「言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力」をしっかりと身に付けていってほしいと思うのである。今、各機関で行っている読書活動の取組を、もう一度振り返り、子どもたちにこのような力を付ける取組になっているかという視点で見直すとともに、より組織的なもの、より意図的・計画的なものへと変えていく必要があるのではないか。

豊かな読書体験をたくさん積み上げることで、これからの世の中をしっかりと自分の力で生きていく子どもを育てていきたいと考える。

語力について」(答申)

樋渡美千代 (2013). 「子ども読書活動推進計画を活用し本が大好きな子どもを育てる」, 『実践国語研究』 37巻 1号, 明治図書, pp15-16

子どもの読書サポーターズ会議 (2009). 「これからの学校図書館の活用の在り方等について (報告)」

水戸部修治 (2011). 「『読むこと』の授業づくりをどう進めるか」, 『初等教育資料』 通巻872号, 東洋館出版社

文部科学省 (2008a). 「小学校学習指導要領」

文部科学省 (2008b). 「中学校学習指導要領」

文部科学省 (2008c). 「小学校学習指導要領解説総則編」

文部科学省 (2008d). 「小学校学習指導要領解説国語編」

文部科学省 (2011). 「言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】」

文部科学省・国立教育政策研究所 (2012). 「全国学力・学習状況調査【小学校】報告書」

坂田仰・河内祥子・黒川雅子 (2011). 『図解・表解教育法規』, 教育開発研究所, pp46-47, pp148-149

山形県教育委員会 (2011). 「山形県子ども読書活動推進計画」

引用・参考文献

文化審議会 (2004). 「これからの時代に求められる国